

シーパワーと海洋国際ルール

—覇権をめぐる400年—

獨協大学外国語学部教授
竹田 いさみ

はじめに

海をめぐる競争の時代で新しい時代が始まろうとしています。先ず歴史に戻ってみてみようかと思って『タイタニック』のビデオをお見せしました。タイタニックは1912年4月に処女航海をしてイギリス・サウスampton港から出港して、フランスの港町シェルブールに寄港後、大西洋を横断してアメリカに向かう途中、氷山に激突して沈没したことで有名です。原因は色々ありますが、タイタニックが登場した時期はイギリスが、世界の海洋覇権を持っていた時代です。

船の世界は400年から500年の歴史があって伝統がありますから非常に複雑です。たくさんの企業が登場して吸収合併を繰り返してきたので面白いのですが整理をするには大変です。

シーパワーとは？ 海の覇権国家

覇権国家とは

- 圧倒的な経済力を保有
- 圧倒的な軍事力を保有

本日のテーマにあるシーパワーは簡単に言うと「海の覇権国家」です。また覇権国家とは圧倒的な経済力や軍事力をもっている国家です。したがって世界の国々は覇権国家に従うこととなります。

21世紀の覇権国家として注目を浴びているのは中国です。中国は現在、圧倒的な経済力や軍事力を持つようとしているから今後覇権国家になりうると思います。覇権国家になると海洋ルールを作ります。過去400年の間に海洋ルールは覇権国家が作ってきました。したがってこれからの海洋ルールは中国が作ることに近いかねません。

本日お話ししたい海洋覇権を考えるテーマとしては以下の通りです。

1. シーパワーと航路の革命
2. 覇権国家イギリスの登場—貿易と流通
3. イギリス—海外基地と海底ケーブル
4. アメリカの登場—石油・パナマ運河・海軍
5. 海洋の国際ルール

この中で中心のテーマはイギリスです。イギリスがどのようにして世界の海を支配して覇権国家になったのかをお話しします。そしてその後アメリカが登場します。最後に海のルールである「排他的経済水域」などの言葉はどのようにして生まれたのか、を説明して終わりたいと思います。

1. シーパワーと航路の革命・支配

- コロンブス： 西インド諸島＝カリブ海の発見
- バスコ・ダ・ガマ： インド洋航路の発見
- イギリス： イギリス東インド会社の設立
- オランダ： インドネシアの領有・植民
(ネシア＝島々の意味)

14, 15 世紀のころの大航海時代は「財宝が眠る」ということで世界中がインドに注目していました。インドという名称が付くのは世界に3か所あります。コロンブスが発見した「西インド諸島」、バスコ・ダ・ガマが発見した「インド洋航路」、マゼラン船団が発見した「インドネシア」、したがってインドが大航海時代のキーワードになっており、ここに財宝が眠ると言われていました。しかし誰もその場所が分からなかったので、探し求めていました。

大航海時代で海洋ルールができる前はカトリックが世界を支配していました。先ずスペインとポルトガルが影響力を持って世界を支配していました。スペインとポルトガルは同じカトリックで陸続きであるためいつもいざこざを起こしており、ローマ教皇に頼んで世界を二つに分断しました。「トルデシリャス条約」で大西洋を二分して、西方をスペインが、東方をポルトガルが支配し世界を地理的に分断しました。これでスペイン語圏とポルトガル語圏に分かれます。

大航海時代の主役たち (15 世紀末～17 世紀末ごろ)

- 前半の主役：スペイン、ポルトガル、フランス
- 後半の主役：イギリス、オランダ

15 世紀から 17 世紀にわたっての大航海時代の主役は、前半はスペイン、ポルトガル、フランスで後半はイギリスとオランダです。大航海時代のイギリスは「海賊国家」と言われました。これには理由があり、国家ぐるみで海賊を行ったからです。海賊たちは「冒険商人」として海賊行為と正規の貿易とを同時に何の矛盾もなく行ってきましたが、エリザベス一世女王の時代に正規の貿易に目覚め、イギリス東インド会社を設立したという経緯がありました。

古い地図は「島」が大きい

古い地図を見ると大陸より島が非常に大きくなっています。これには意味があります。帆船の時代は島が生命線となり、遠洋航海時の水や食料の補給や木造の帆船の修理などで島がなくては航海が続けられません。また水や飲料は腐りやすく補給が難しいので代わりにビールやジンカワインを毎日飲むので必然的に海賊はアル中になってしまいます。

新たな航路の革命・スエズ運河

新たな航路の革命は大航海時代から見ると 19 世紀の 1864 年になります。それはスエズ運河です。地中海と紅海を結ぶスエズ運河は世界貿易に革命を起こしました。喜望峰(ケープタウン)経由と比べて約 8,000Km の航路を短縮できたからです。これはフランスの元外交官レセップスの夢でした。個人の夢で歴史を変えた人です。エジプト駐在の時に王家と親しくなり、フランスの外交官をやめた時に運河を造ると声明して、建設資金をヨーロッパ中心に集めました。イギリスが反対します。その当時イギリスは喜望峰経由で航路を持っていたし、スエズ運河ができる前は鉄道を持っていたので、運河ができるとイギリスの利権が全部なくなってしまいます。したがって運河の建設には反対しますが、いったん完成すると、今度はスエズ運河会社の株の半数を買収し、それまで筆頭株主であったフランス政府を差し置き、イギリス政府は一夜にして筆頭株主になりました。

イギリス日露戦争で日本に協力

スエズ運河は地政学的にどの様な意味があるか、1904 年の日露戦争でイギリスはロシアのバルチック艦隊に対して以下のように日本に対して協力します。

① スエズ運河の航行の禁止

これによりロシアのバルチック艦隊は喜望峰経由の航行となり長期の航海で疲労困憊になる。

② 良質のウェールズ産の石炭をロシアには売却しない

質の悪い石炭を購入して、激しい黒煙をだし航行を妨害した。

③ 日本に対してバルチック艦隊の詳細情報の提供

日英同盟のおかげでロシアの動向をイギリス経由で逐一把握できた。

次の航路の革命・パナマ運河

次の航路の革命はパナマ運河です。開通したのは1914年で、当時コロンビア領内にあった「パナマ地峡」を掘削して運河を造り、大西洋・カリブ海と太平洋が結ばれ、世界貿易の航路及び軍事戦略に革命的な変化をもたらすことになりました。

スエズ運河を造った元フランス外交官のレセップスがパナマ運河を造ろうと言い出しました。スエズ運河で成功しているのでフランス国民からの資金は簡単に集まりましたが、パナマ運河の開発は大失敗に終わります。それは労働者がマラリアなどの熱帯病により数万人単位で死んでいきます。したがってスエズ運河方式での建設はすべて失敗しました。

それに気が付いたのはアメリカの大統領のルーズベルトです。彼は「スエズ運河」を造ることと「大海軍」を作ることが夢で、大統領になる前から目標は明確でした。パナマ運河ができる前まではアメリカは大西洋艦隊が中心で太平洋に移動するには南米大陸北端のマゼラン海峡を航行する必要があり大変でしたが、運河ができることにより大西洋艦隊を太平洋に移動することが容易になり、1907年にアメリカ海軍の大西洋艦隊「グレートホワイトフリート」が世界一周航海を行いました。

これは日露戦争に勝ったばかりの日本に対して、アメリカ海軍の力を誇示する目的もありました。はじめは日本に寄港する予定はなかったが、日本政府が日本に寄港することを懇願し実現しました。これにより日本を仮想敵国として攻撃する予定であったが、日本との友好関係を表面的には維持できるようになりました。

船舶の企画 「パナマックス」

パナマ運河は山をエレベーター方式で登ってゆくために船のサイズが決まっています。したがってアメリカ海軍軍艦はすべて通行できるサイズに造られています。

全長：約 274m 全幅：約 32m 喫水：約 12m

2016年にパナマ運河拡張後に「新パナマックス」サイズに変更しました。

全長：約 366m 全幅：約 49m 喫水：約 15m

「パナマックス」のサイズを超えるものを「ケープサイズ」と言い、パナマ運河やスエズ運河を通航できないので、喜望峰やホーン岬周りの航行となります。

2. 覇権国家イギリスの登場—貿易と流通

覇権国家 新しい航路の支配

シーパワーの登場で新しい航路を支配した国が常に「海の覇権国家」になります。

- スペイン・ポルトガル時代： 大航海時代で世界の航路を支配する
- イギリス時代： スエズ運河の買収
- アメリカ時代： パナマ運河の建設
- 北極海航路： 軍事的にもビジネス的にも意味があるが、これからの検討課題

覇権の推移 貿易と流通

- スペイン
砂糖の生産・流通
世界通貨 シルバーの支配（南アメリカ：ポトシ銀山、日本：石見銀山）
- ポルトガル
スパイス・コーヒーの流通大手

- イギリス
国策としての海賊
産業革命「世界の工場」、大英帝国
- アメリカ
石油の発見・生産・流通
- ヴェネチア
覇権国家になりそうでなれなかった国
 - ① 十字軍遠征の補給基地
 - ② オスマン敵国とヨーロッパ諸国の接点
イスラム教徒とキリスト教徒の交流拠点で中継貿易国として栄える
(薬としてのスパイス・コーヒー)
 - ③ カトリック教徒が貿易を独占しプロテスタントは締め出される

覇権国家を夢見るイギリスの登場

16世紀のエリザベス一世時代は大変貧しい国でしたが、スペイン無敵艦隊に勝って、大航海時代にイギリスは国家権力と海賊が一体化して「海賊国家」を造りました。「パイレーツ女王」と言われたエリザベス一世は16世紀後半に女王になって、貧しかったイギリスを豊かな国にした立役者です。大変な戦略家で彼女のおかげでイギリスは海賊国家になり覇権を求める入り口を拡張してきました。

超大物海賊 ドレーク

ドレークは海賊としてスペイン・ポルトガルの船を標的に略奪を続け、偶然に世界一周を成し遂げました。また国家予算の3倍もの金額を献上し、エリザベス一世からナイトの称号を貰いました。イギリスにとって「Good Pirates」は王室に大金を献上した海賊で「Bad Pirates」は献上しない海賊で絞死刑になりました。これが歴史の事実です。

スパイ組織

エリザベス一世女王が組織化したイギリス初のスパイ組織はケンブリッジ大学の学生をリクルートして作りました。これはエリザベス一世女王の側近がケンブリッジ大学で学んだことから指導教授や後輩が大学に沢山おり優秀なエリート学生をリクルートしました。イギリスでは16世紀からエリートの学生はスパイ組織に入りました。

貿易マシーン

イギリスでは常に海賊を最先端で使って各種貿易を行いました。

- ① 地中海貿易ーヴェネチア、レバント地域
- ② 西ヨーロッパ貿易ーアントワープ、モスクワ
- ③ カリブ海・アフリカ貿易ーカリブ海、西アフリカ・ギニア湾周辺
- ④ 東インド貿易ーインド、東南アジア

東インド会社の設立

- 正式名称：「東インドとの貿易を行うロンドンの商人たちのガバナー(代表)とカンパニー(組合)」
- エリザベス一世女王が許可：1600年12月31日
- 海賊たちが提案：資金、帆船、船員を全部提供して作った最初の総合商社

初代会長はトマス・スミス

女王陛下の東インド会社とも言われ、独自で通貨も発行して非常に強力な権力を持ちました。

三大貿易圏の商品

- ① 地中海： スパイス、コーヒー、砂糖、奴隷
- ② カリブ海・大西洋： 砂糖、奴隷
- ③ 東インド： スパイス、コーヒー、紅茶

地域ごとに特性があり、イギリスでは始めは会社同士を競わせて勝ったところが一社独占スタイルでビジネスを行いました。したがって会社の数はどんどん絞られてきます。最後まで残ったのは東インド会社です。

イギリスはスパイスの国でした。薬として非常に利益があるスパイス貿易を一番重要視し、富裕層に売り込んで儲けました。

またイギリスは紅茶の国と言われますが、元々コーヒーの国でした。東インド会社を通してコーヒーを輸入して、ロンドン周りには一時6,000軒くらいのコーヒーハウスがありました。その内の一軒が「ロイズ」で、今は世界最大手の保険会社になっています。これも海賊が作った会社になります。

英国の産業革命、大英帝国

日本ではイギリスの歴史は大変豊かになった産業革命から教えます。しかし産業革命前は非常に貧しい国でした。また産業革命に必要な研究開発資金は以下の方法で調達しました。

- ① 海賊マネー
- ② 密輸（秘密の貿易）＝奴隷貿易
- ③ 表の貿易＝スパイス、コーヒー、紅茶

一番稼ぐのが①、②で③の「表の貿易」で稼げるようになるまでは①、②の「裏の貿易」で支えてきました。したがってイギリスは「表」と「裏」を上手に使い分けてきました。このことを充分理解してイギリス人と付き合う必要があると思います。

大英帝国 パックス・ブリタニカ（イギリスによる平和）

1850年ころからイギリスは「世界の工場」と言われて世界一の海軍力を持っており20年ほど続きましたが、その後むしろ「世界の銀行」としての役割の方がイギリスにとって重要であったと言われています。

3. イギリスー海外基地と海底ケーブル

イギリスは覇権国家として世界中に海軍基地を造りました。今でも植民地としてではなく拠点として残っています。イギリスの世界中にある植民地に海軍基地を建設して、海軍基地を守るために陸軍の駐屯地を併設して、官民一体となって19世紀末までに全世界の海軍基地を海底ケーブル網で繋ぎました。インテリジェンス（情報・諜報）の重要性を世界でいち早く理解していました。

日本の明治維新の時にはすでに海底ケーブル網は完成していました。19世紀後半に日本の長崎とウラジオストック、上海間で海底ケーブルを敷設しました。その時、イギリスはすでに世界の情報通信を抑えていました。

イギリスの民間会社でイースタン電信会社(ETC)が海底ケーブル事業をほぼ独占しており、世界規模で海底ケーブルを作り、それをイギリス政府がタイアップし、このケーブル会社を通して入手した世界中の商品情報、外交機密、軍事機密はいち早くイギリス政府に送られました。

また世界中の政府・会社がETCの海底ケーブルを利用しました。イギリスの賢さはケーブル使用料を低額に抑えて世界中の国に利用させたことです。したがって世界中の情報が自動的にイギリスに集まりました。

4. アメリカの登場ー石油・パナマ運河・海軍

アメリカが覇権国家に

- 石油の発見・生産・流通
- パナマ運河の建設
- 大海軍の実現

アメリカの覇権国家の始まりは石油の発見になります。19 世紀に石油の発見はアメリカとロシアです。アメリカ本国の北部で発見し生産・流通はロックフェラーのスタンダードオイル社がほぼ独占していました。日本も 20 世紀前半にアメリカのスタンダードオイル社から輸入しました。

アメリカで初めに石油が発見されたときは単に黒い液体が出ただけで、これがエネルギーに使われるとは思ってもみませんでした。のちに自動車エンジンが発明され、船の燃料も石炭から石油へとかわり、石油によるエネルギー革命がおきました。

それまでは、アメリカの家庭では家の中の灯は鯨油を使っていましたが、石油が発見されたおかげで鯨油を使わなくなりました。したがって、それまでは非常に盛んであった捕鯨が衰退してゆきます。

アメリカは 20 世紀初めにセオドア・ルーズベルト大統領の登場によりアメリカの覇権国家が始まりました。彼はアメリカを世界の一流国家にするという夢があり、その一つが「パナマ運河の建設」です。フランスのレセブスが失敗に終わったパナマ運河建設を引き継いで、ロッキー山脈などで活躍した技術者を大量に連れてきて、建設に当たらせました。運河を造るために計画的にコロンという街まで造りました。これは労働者の生命、財産を守るため、ここで病気対策を行いました。

もう一つはアメリカを「大海運国にする」ことで、はじめに海軍の戦艦をたくさん造りました。また第二次世界大戦のときは数百隻の航空母艦を造りました。真珠湾攻撃の後、アメリカ軍は航空母艦中心の戦闘態勢で徐々に日本を敗戦に追い込んでいきました。

経済力があって海軍力が優れていれば自然に覇権国家になってしまいます。

5. 海洋の国際ルール

海洋の国際ルールは世界の貿易や軍事を支配する派遣国家が中心となって作っていきます。

- 領海 イギリス
- 接続水域 イギリス、アメリカ
- 大陸棚 アメリカ
- 排他的経済水域 (EEZ) 途上国
- 国連海洋法条約 (UNCLOS) 米欧日 + 途上国

領海

18 世紀から 19 世紀にかけて海洋大国になったイギリスは世界中の海を自由に公開したいとの願望して領海はなるべく狭くするべきだと考えていました。もともと魚が豊富なドーバー海峡からオランダ漁船を締め出すためにイギリスは領海という概念を一方向的に宣言しました。そして密輸、密航や関税の取り締まりを行うため領海の幅は 3 カイリ (約 5.6Km) を採用するようになりました。

接続水域

豊かになったイギリスとアメリカの発想で、元は密輸船を取り締まるために作られました。密輸船は高速船が多く領海 3 カイリの範囲では追跡・検挙が困難でした。この問題を解決する方策として、領海を越えて逃げる密輸船を追跡・検挙できるように、もう少し広げて接続水域 12 カイリが誕生しました。

大陸棚

大陸棚の発想はアメリカから出ました。日本は島国ですからこのような発想は起こりません。1945 年にアメリカのトルーマン大統領が「大陸棚宣言」を出します。アメリカ大陸に繋がっている海底はアメリカが管轄するという内容です。したがって大陸棚にいる魚(主にサーモン)の管轄権はアメリカにある

ので他の国では魚を捕れないこととなります。

もう一つは石油です。大陸棚の下には石油が眠っています。アメリカは既に内陸での石油開発はほぼ終わっているのに、大陸棚に目を向けました。ロックフェラー財閥のスタンダード石油が独占しており石油ビジネスで大金持ちになり本部のあるニューヨークは巨大な近代的都市に発展しました。

大陸棚はそれぞれ海岸を持つアメリカの各州に所属していたので、各州の企業が海底油田の開発に名乗りを上げるようになり、州独自の利権を確保する動きが生まれました。こうした州の動きを封じ込める目的でトルーマン大統領は連邦政府が大陸棚海底と漁業水域を管理するとの「大陸棚宣言」を国内向けに発しますが、後に世界条約として「大陸棚条約」に変わってゆき世界を支配します。

排他的経済水域 (EEZ)

アメリカが大陸棚宣言をしたので、南米の国々が自分たちの国の海上の支配権を主張して海上、海底などを領有化する宣言をしました。海底の天然資源に加えて海上の漁業権も主張しました。

1952年南米のチリ、ペルー、エクアドルはチリの首都サンチャゴで国際会議を開き、領海 200 カイリに関して管轄権を有するという「サンチャゴ宣言」を発しました。

1950年ころになるとアジアやアフリカの発展途上国が発言権を持つような時代になると、それを抑えるために排他的経済水域という形で妥協していきます。海の国際法は先進国と途上国のせめぎあいの中で生まれた妥協の産物です。

国連海洋法条約 (UNCLOS)

「海の憲法」と呼ばれる国連海洋法条約(UNCLOS)が締結するまでに国連(スイスのジュネーブ)が主導した国連会議は三次に及び、およそ 30 年かけて紆余曲折を経て誕生したことになります。ここに至るまでの大変な労力と時間を思うと世界中の国々を巻き込んで利害調整をすることがいかに大変であることが解ります。

海洋の拠点

国連海洋法条約ができた後、イギリスが運用の拠点となり、国連の専門機関の一つである「国際海事機関」(IMO)の本部はロンドンに置かれ、ここで海に関する具体的なルールが決まります。国力が落ちても海のルール作りはイギリスで行っています。

中国の海洋進出

今中国は国連海洋法条約に反することばかりやっています。中国は南シナ海周辺の島々を全て領有していると一方的に宣言して、周辺国が実効支配しても無関係に中国の領有権を主張しています。中国が領有したい点在している島々を地図上で結び「九段線」と呼ばれる境界線を中国製の地図に印刷して、島々を繋ぐ海峡のすべてが中国の領域であると主張しています。日本の尖閣諸島もその良い例です。

しかし東シナ海ではまだ人工島は造っていません。それは日本やアメリカが造らせないように常に監視しているからです。やはり常に監視して中国が違法行為をしていないか確認して情報発信して、中国に警告を与える必要があります。それを失敗したのが南シナ海です。

日本は常に海上保安庁や自衛隊を総動員して東シナ海を監視しています。このように中国に対して隙を与えないことが一番重要なことだと思います。

以上で今回の講義を終了させていただきます。

【質疑応答】

- Q**：日本と韓国で領有権を争っている「第7 鉱区」で韓国が大陸棚の領有権を主張して日本は中間線での分割を主張しているが、今後日本側の主張が認められるのか知りたい。
- A**：最終的に大陸棚の領有権は国連の検討委員会がデータをもとに判断するのが通常の方法です。しかし各国がそれに従うか従わないかは別問題です。現状は日韓の間に中間線があり日本は韓国をあまり刺激しないように平和な秩序を作ってゆくようにしています。
- Q**：尖閣問題でヨーロッパのイギリス、オランダ、フランス、ドイツが艦艇を南シナ海に派遣するようですが、彼らの目的は何ですか。
- A**：今世界の経済的な中心はアジアに移っています。また軍事的な緊張関係でホット・スポットになっているのは南シナ海をめぐる中国の軍事活動です。したがってヨーロッパが軍事的にも本格的に中国を意識したということだと思います。したがってアメリカやヨーロッパが中国に対して牽制するように強いメッセージを発して政治的な空気を作ることが目的だとも思います。
- Q**：日英同盟はワシントン会議で無くなったと聞いていますが実際はいかがですか。また今後日英同盟が結ばれる可能性はありますか。
- A**：日英同盟は共通な敵がロシアということで思惑が一致して結ばれました。日露戦争後日英同盟がおかしくなってくるのは共通の敵を失ったからです。その後日米関係が悪くなった場合、日米で戦争が起きた場合、イギリスは日本側に立つことになるので日英同盟を改定します。第二次世界大戦で日本は太平洋に巨大な海軍力を持つようになり、日本の海軍力に恐れをなして、英米は結託して日本をターゲットにしたワシントン会議を持ち、日本の軍事力を落とすよう仕向けました。
- 今の状況で日英同盟は結ばれるとは思えません。同盟とは結局軍事同盟ですから日本にとって軍事同盟を結ぶのはアメリカしかいませんので、日英のパートナーシップはあっても日英同盟の可能性はないと思います。
- Q**：中世ヨーロッパのスペイン、ポルトガル、イギリスなどは戦略をもって事にあったように見えますが、それは国民性からくるものか、王室の指示で動いたのか知りたい。これからの日本はどのようにして戦略を作ってゆけばよいですか。
- A**：歴史的に言いますとスペインもポルトガルも王室のバックアップがあってコロンブスやバスコ・ダ・ガマも大航海を成し遂げたわけです。つまり大偉業を成し遂げたのは「官」と「民」がタイアップして成功した例です。日本で「官」と「民」がタイアップして成功した例は明治維新だと思います。
- いずれにしても戦略を立てる政治家が必要です。その当時イギリスやアメリカではそのような政治家がいました。では日本はどうしたら良いのか、それはどの様になりたいかが重要だと思います。中国のようにガムシャラに働いて経済力をつける国になるのか、シンガポールのように知識集約型の先端医療や IT のような産業を興すのかなど、日本はどのような国になりたいのか、また経済的な繁栄なくしては国民に富の分配ができないわけですから、どのようにして儲けるのか、それに対して政府がどの様に協力するのかなどの国民的なコンセンサスをもって戦略を立てる必要があると思います。

竹田 いさみ (たけだ いさみ) 先生のプロフィール

獨協大学外国語学部 教授

【略歴】

1952年 東京生れ

上智大学大学院国際関係論専攻修了。シドニー大学・ロンドン大学留学、国際政治史で博士号。

東南アジアを中心に「世界の現場」で調査研究。海洋安全保障、海賊の世界史、インド太平洋情勢を研究。

アジア諸国を舞台に国際ジャーナリスト会議をプロデュース。

【主な著書】

『海の地政学——覇権をめぐる400年史』（中公新書）

『世界史をつくった海賊』（ちくま新書）

『世界を動かす海賊』（同上）など。アジア・太平洋賞特別賞など受賞
旬の新書を紹介するコラム「解題新書」を『読売新聞』に連載中